

無農薬の柑橘でお酒づくりがしたい 大三島の小さな工房で リモンチェット作りをはじめました

株式会社リモーネ 代表取締役 山崎 学 (今治市)



◆東京から移住、 そしてリモンチェットが完成

2008年3月、夫婦二人で東京からしまなみ海道に浮かぶ「愛媛県大三島」に移住した。自分たちで栽培したレモンでリキュールを造りたい！そんな夢を叶える地域を東京にいる時から探し求め、たどり着いたのが「大三島」。

東京で開催される就農説明会に顔を出し、西日本から瀬戸内海地方、そして誘われるように目的地向けられて、移住先を大三島に決めた。

妻がイタリア留学中にイタリアの家庭酒「リモンチェット」に魅了されたのがきっかけで、いつかは自分たちで造れたらいいなあ。まあ、農業経験ゼロからのスタートだし、レモン栽培に自信がなかったら念願のリモンチェット造りにいつかチャレンジしよう、そう考えていた。しかし、

そんなゆとりは最初の数か月で消え失せた。目減りする一方の貯金残高に加え、「リキュールを造りたい」その夢を叶えたければ、全身全霊で取り組まなければ「夢」のままだ終わってしまう厳しい現実を目の当たりにした。

移住しても夢破れ、帰京する人々の噂はいやでも耳に入ってくるのが地域社会。ゆえに心は焦った。

縁あって出会えた西条市の成龍酒造さんの理解と協力の元、我々夫婦が酒造場に通う「出張製造」という形で一年後には「大三島リモンチェット」が完成。酒販免許も



リモンチェットのふるさと

取得し、大三島の古民家を改修したアンテナショップ「リモーネ」も開業した。

耕作放棄地となっていたレモン畑を再生させた。接ぎ木をし、苗木も植える。地域農家さんの指導もあり2012年には「有機JAS認定」も取得できた。

2009年に開業した「リモーネ」も、リキュール以外に様々なオリジナル商品を手掛け顧客を増やしてきた。もちろん、西条市に通う「出張製造」も続けて。

◆リキュール製造免許取得

成龍酒造さんとの関係も良好な上、なんの不満もなかったが、「大三島に酒造場を開設したい」そんな夢を打ち明けると「応援します」と快諾をいただき、そこからは今治市企画課の尽力で2014年、やっと「リモーネ」で「リキュール製造免許」が交付された。

成龍酒造さんに夢を打ち明けた夜から実に二年以上が経過していた。

なぜ、そんなにも時間がかかったのか？お酒を管轄する税務署の見解では、「リキュール」とは柑橘のエキスと糖分、そしてアルコールを混和するもの。あるいは浸漬する「梅酒」のように、製造方法はその昔から確立されているものがリキュールであって「特区」におけるリモンチェット



特集 特区認定「どぶろく」 などの製造を通じた 地域おこし、交流拡大

ネーブルチェット口



口の「製造方法」が確立されていない、それが一番の理由であった。

そこから、日々、税務署との折衝と書類作りに膨大な労力と時間を要する

こととなった。それを機にそれまで参加していた地域の様々なボランティアから遠ざかってしまった。とてもじゃないが、「有機農業」「店舗管理」に加え、煩雑な酒造免許手続きに手を取られ「ボランティア」にまわせる時間が取れなくなったからだ。

このままでは「地域のやりたいことに参加する一人として埋もれてしまい、自分のやりたいことが後回しになってしまう」そう思い至ったのもう一つの理由だ。

地域おこしに汗を流す前にお前は自分の人生を興しているのか？自身の人生をより活性化させるため自問した結果だが、これから今の事業が軌道に乗りはじめれば、もう一度地域の中で何ができるかあらためて考えていきたい。

◆お客さまの声が財産

大三島に酒造場を開設して無事、一年が過ぎた。日々の作業に追われながらも「やりたいこと」が次々に、湧いてくる。それに対して課題も露見しその都度、改善もする。やるべき事案が具体的だから他業種交流会などに参加しない。識者と言われる方の意見は、過去のデータや統計による数字の羅列で、机上の空論にちかい。日々、店舗でお客様の声を直に聞ける今のリモーネはこれ以上ない財産だ。リモーネ開店当初から掲げていることがある。

大手百貨店に扱ってもらうことがステイタスと思わない。それよりも愛媛県、小さな島の大三島にある「リモーネ」に直接、足を運んでくださるお客様がいる。その事実を何よりも大切にしたい。

◆これからの課題

リモーネが成功しているとは思わない。後継者を作れて、はじめてその言葉を使いたい。人口を増やしたい、移住者を増やしたい。氣勢を上げるのは簡単だが、身銭を切るには勇気がいる。様々な支援制度は本来「助成金」をもらうことが事業のスタートなのに「目的」になっているケースが見受けられる。上げた氣勢が「金」に変わ

る裏側をみるにつけ矛盾を感じる。ただし「助成金」ありきであっても、声をあげる人がいなくては地域も疲弊する一方というのも、これまた悲しい。

私が抱えていた問題として、地主さんの好意で樹園地を貸してくれたが、登記上の地目が「山林」のため、やむなくお返ししたことがある。地目が「畑」でないと『ヤミ小作だ』と指摘を受けたためである。

山林の所有者が自ら開拓し、ミカンを植えたが高齢のため手放すと、その樹園地は荒廃するしかないのだそうだ。私のような、イターン移住者にしてみれば、時代の変化を先読みし、地域行政は今からでも手を打つべきだと考える。同じく市や県が管理する、もう何十年も放置された建物や区画も一般に開放してもらえれば、今の時代に生まれ変わるものがたくさんあるはずだ。「老朽が進み安全が確認できない」のであれば、それこそ識者や助成金の出番だと思いがどうだろう？



リキュールとクッキー